

静岡

伊豆には明治以降、川端康成、夏目漱石、芥川龍之介、太宰治、三島由紀夫など日本を代表する多くの作家や詩人が旅し、滞在し、さまざまな作品を残した。どの作品も、それまでの日本文学には見られない独特な抒情と色調で彩られており、日本人の抒情は伊豆で形づけられたともいえる。

また、伊豆は東京の奥座敷である一面、秘境の趣きがあり、都会の喧騒を逃れた作家たちは、伊豆の自然や人情、温泉、食を愛でながら創作に励み、その足跡や交友の跡は、伊豆ならではの文化として未だこの地に残されている。

これら「伊豆ならではの」、「伊豆だからこそ」という文化を活用し、新しい視点にたった観光ストーリーを国内外に発信しようという動きが出始めてきた。

そのために活用するのが文化庁の「日本遺産」認定登録である。日本遺産は、歴史的建造物や特

色ある有形・無形の文化財を「ストーリー化」した地域を認定するプログラム。昨年度認定がスタートし、これまでに水戸市周辺の「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」、淡路市周辺の「『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」—古代国家を支えた海人の営み—」、唐津市周辺・佐世保市周辺の「日本磁器のふるさと 備前—百花繚乱のやきもの散歩—」など37件が登録されている。昨年度だけをみると、申請67件、認定19件と狭き門である。ただし、認定されれば、文化芸術振興費補助金（日本遺産魅力発信推進事業）により多言語HP、パンフレットの作成、ボランティア解説員の育成、周辺環境整備などが可能になる。文化庁は訪日外国人旅行者の受け皿として、2020年までに全国で100件以上程度を認定する方針を示している。

伊豆が認定登録を目指す物語は「伊豆の旅館文化と文豪遺産」（仮称）（伊豆市、河津町連携）。川端、夏目など多くの作家や詩人が伊豆に滞在し、数々の作品を世に送り出した足跡に地域の伝統や文化を盛り込んだ観光ルートを開発、発信する。今後のスケジュールは、有識者会議の設置と遺産の調査・選定、関係市町による推進協議会の設置を経て、来年8月に登録申請する予定である。この6月には伊豆市湯ヶ島地区にて「川端康成学会」第43回大会が開催され川端と湯ヶ島との関係が改めて認識された。また今年には夏目漱石没後100年、来年は生誕150年を迎える。伊豆から生まれた文学は欧米をはじめアジア諸国において翻訳され、多くの外国人にも読まれている。

2020年東京オリンピックの自転車競技は伊豆市で行われ、多くの外国人が訪れる。温泉、旅館、風景が、文豪・墨客の感性を射抜き“文学の母の国”として愛された伊豆。新たな観光の物語が、国内のみならず全世界に発信され、多くの方々が同地を訪れることを期待する。

「伊豆の旅館文化と文豪遺産」（仮称）で日本遺産登録を目指す



川端康成の「伊豆の踊子」ゆかりの温泉旅館